

学会報告

経済理論学会

須田 文明

私は経済理論学会第54回大会（2006年10月21~22日、愛知大学、車道キャンパス）に参加した。この大会では、企業、雇用、環境、情報、景気循環、グローバリゼーション、中国・韓国、ジェンダー等の各部会の他、英語での報告部会が設置され、共通論題「現代株式資本の変容と病理」というシンポジウムが開催された。

私自身は、企業部会で「資本主義の新しい精神と企業倫理」という論題で報告を行った。ゆきがかかりでリュック・ボルタンスキ他著『資本主義の新しい精神』（ナカニシヤ出版）という書物の翻訳を担当することになっており、せっかくの機会でもありボルタンスキの議論を現代資本主義分析に応用したいと考えたのである。

現在、行き過ぎた（と考えられる）市場重視の経済政策に疑問が提示されるようになってきている。その背景には、次第に明らかになりつつある「経済格差」への社会的批判がある。ボルタンスキが強調するように、資本主義の進化のためには「批判」が不可欠な原動力である。私の報告は、近年、隆盛を見ている「企業の社会的責任CSR」をめぐる議論は、一連の企業不祥事やグローバリゼーションの負の側面に対する批判を迂回するための、「方便」でしかないのか、それとも、真に経済社会を進化させる「正統な試験」をなしているのかを検討するための前提作業を提示する、という趣旨であった。

ボルタンスキによれば、資本主義は資本蓄積そのものを自己目的としており、この過程に人々（とりわけ資本主義のスポークスパーソンたる管理層）をコミットさせるためには、資本主義は、このコミットが公益に資する、という倫理的動機付け（資本主義の「精神」）

を動員しなければならないというのである。ところが資本主義は、「形式的に平和的な手段による、資本の無制限の蓄積の要請」でしかなく、こうした正統化イデオロギーを自ら調達することができず、自らに対する「批判」からこれをくみ取らなければならないのである。このような批判は、社会的不平等や貧困への批判という社会的批判と、「まがい物性」批判という芸術家的な批判という、二つの形を歴史上とってきた。後者の批判は、とりわけ68年5月に顕著であった。

こうした議論に照らして、CSRを批判的に検討することで、CSRは正統なる制度として確立し資本主義を進化させることになる、と私は結論づけた。さらにこうした議論を農業食品分野に適用させてみよう。よく知られているように、68年5月以降、先進各国の若者たちが「真正なる」ライフスタイルを求めて農村に移住し、ある者たちは地域で有機農業運動のリーダーになっていくという道を辿っている。これは、ボルタンスキの言う芸術家的批判の一つの形であるだろう。他方、南北間の格差の是正を求め、途上国の農民の所得の向上を求めるようなフェアトレード運動は、社会的批判に立脚していると考えることができる。量販店や食品企業によるCSR行動への取り組みも目立つが、こうした行動が農業生産部門をどのように掌握し、農業と農村をどのように変容させることになるのか、興味深いテーマをなしていよう。

さて、本大会では、山口「正規・非正規雇用代替の企業行動」、間宮「非正規雇用への代替と経済成長」、四方「所得格差とジェンダー：90年代後半以降の雇用の非正規化と夫婦の収入」と、現在の経済状況の喫緊の課題に取り組む、切れば鮮血が飛び散るような報告が若い人たちからなされている。社会的批判が経済理論を捉え、経済理論がこうした社会的批判をさらに豊かにし、ひいては資本主義の進化を促進するよう、本学会の活動に期待したい。現在こそまさに、本学会にとって千載一遇のチャンスをなしていよう。